



多田富雄の

# 落葉集

題字・古谷蒼碩

降誕祭の月、今年取って置きの心温まる話をしよう。

石川晶という名前を覚えていたであろうか。日本におけるビー・バップジャズの草分けで、類まれなジャズドラマーとして活躍した。彼は無類の子供好きで、NHKの「ワンツー・どん」という番組で、リズムの楽しさを子供たちに教えた。ひげのおじさんとして思いつく方も多いと思う。

東京・恵比寿に、「ジャズのライプハウス「ヒガビガ」を開き、来日したジャズマンたちが生の演奏を披露した。私も、彼のトーンキングドラムに酔いしれた一人だった。自己宣伝が好きではなかったため、彼の名はあまり

知られていない。彼は1990年に、突然ドラムの故郷アフリカのケニアに一家で永住してしまう。首都ナイロビに住み、アフリカンドラムを探究する傍ら、貧困にあえぐスラムのストリートチルドレンを救う活動を始めた。私がそれを知ったのは、彼の兄で私の親

友石川嘸熊本大学名誉教授からの便りであった。

ナイロビ最大のスラムはキベラという地区にある。そこには二万人を超す家にも帰れず、学校にも行けないストリートチルドレンがいる。食う物がなければ盗みやゴミ漁りに一日を費やし、シンナーで空腹や悲惨な現

実を粉らわしている。シンナーを買うためにまた非行に走る。この悪循環だ。貧富の差は想像を絶し、ナイロビの市街の100歩も続くゴミの山には、こんな子供たちが群がっている。

石川晶さんは、キベラの子達を更生させるための運動を開始した。それが「フューチャーキ

## ケニアからの歌声

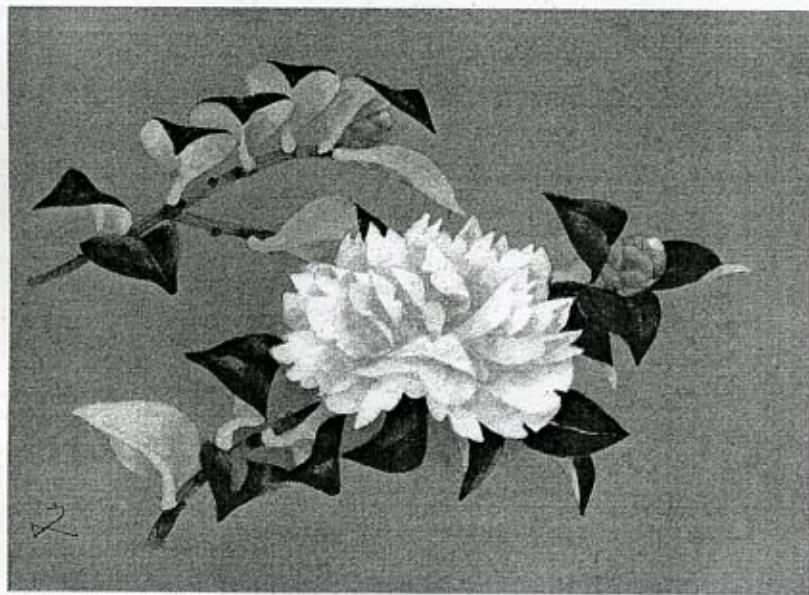
「ツズ・プロジェクト」である。そうはいってもお金があるわけではない。あるのは自分のめりこんでいるアフリカリズムだけだ。少しばかりの食べ物と、ドラムなどの楽器、親しくしている現地のミュージシャンに参加してもらい、子供たちとともに歌い、かれらを勇気付けた。はじめは食物目当ての子供たちも、いつしか音楽の力で集まってきた。ケニアの有名な音楽家のカソングさんもボランティアで加わったところから、ナイロビではその存在が知られるようになり、何枚かCDも出した。

をひきつけたばかりでなく、立ち直る勇気を与えた。音楽教室ではケニアの公用語である英語も教えるようになった。子供たちは、コンサートで歌うためにシンナー遊びをやめ、将来は音楽家になるという希望を持つものもいた。それは彼らが初めて持った、すばらしい夢であった。晶さんの遺志は徐々に実を結び音楽教室には1000人を超える子供が参加している。徐々に学校も充実し、シンナーを吸う子は少なくなった。子供たちの顔は目立って明るくなった。

石川さんたちの合言葉は、スワヒリ語で「ボレボレ(ゆっくりいこう)」であった。思の長い活動でなければ、到底この子供たちを救うことはできない。

昨年の12月、私はキベラの子供たちの歌うクリスマスソングのCDを贈られた。「シングルベル」や「もろびとこぞりて」などの聖歌がボンゴやギターをバックに、アフリカ独特の高揚したリズムで歌われている。十歳にもみえない子供たちが、白い歯を見せて懸命に歌っているのが目に浮かんで、私は深い幸福感に満たされる。

今年もその季節になった。私にCDを贈ってくれた石川教授は、残念なことにこの夏に癌で亡くなった。でもキベラでは石川晶さんの遺児たちが、「ボレボレ」の精神で活動を続けている。www.future-dreams.orgで彼らの活動が見られる。支援するあなたの心も温かくなるだろう。(ただ・とみお 免校学者)



画・堀 文子